

第97回 防災カフェを開催しました。



防災の輪を広げるために

～えふえむ草津「ハッピーぼうさい」の挑戦～

日時：2025年3月7日（金）18時30分～20時

話題提供 関西大学社会安全学部 近藤ゼミ 西出 梨乃 さん
関西大学社会安全学部 近藤ゼミ 橋倉 丈樹 さん
関西大学社会安全学部 近藤ゼミ 大山 太陽 さん
えふえむ草津 パーソナリティ 中嶋 裕恵 さん
草津市危機管理課 小川 冴子 さん
ファシリテーター 関西大学社会安全学部 教授 近藤 誠司 さん

コミュニティFM放送局「えふえむ草津」では、2017年度から、毎月2本、1時間サイズの防災トーク番組を大学生たちが発信してきました。題して「ハッピーぼうさい」です。防災の輪が広がるように様々な工夫を重ねてくれました。本年9月には、記念すべきシリーズ第200回の放送を迎えられます。ローカルメディアの挑戦、その舞台裏をお話いただきました。



ハッピーぼうさい 出演者のみなさん

本日のキーワードは
これです！

まなび合い
“まなび愛”

近藤さん:キーワードは「学び合う」という言葉です。いろんな人と学び合うことでいろいろな考え、知恵、工夫、アイデアを知ることができます。「学び合い」の「合い」の文字を漢字の「愛」にしています。番組づくりにおいても学び合いのラブを大事にしています。

「ハッピーぼうさい」は草津市を中心に、大津市の一部のエリアでも聞くことができます。30分から60分ほどのトーク番組です。中

嶋さんが編集と進行をされ、市役所の危機管理課の職員の方と学生がトークを進めています。学生が台本を書くところからスタートします。どんな防災のテーマで話そうかを考えて、台本を組んで、自ら出演します。放送時間帯は、月の前半が、毎月第1火曜日と第2火曜日の昼、夜、深夜の3回、計6回放送し、月の後半は、毎月第3火曜日と第4火曜日の昼、夜、深夜の3回、計6回放送です。

要は、1ヶ月に2つのコンテンツを放送しています。なお、Webからの聞き逃しサービスも利用できます。3月4日には第187回を放送しました。そして9月には記念すべきシリーズ通算200回目を迎えます。この長期的な取り組みは、コミュニティFM放送の業界の中でも珍しいご長寿番組ということで、ジャパン・レジリエンス・アワード（国土強靱化大賞）の教育機関部門の最優秀賞をいただきました。

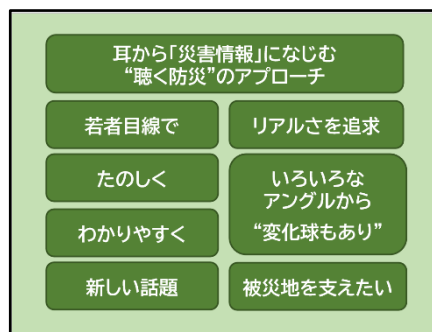
さて、キーワードの「学び合い」について、何をどう学び合っているのか、学生の皆さんに聞きたいと思います。普段ラジオは聞いていないのではないかと思える世代が、出演して、取り組んでみてどのように感じていますか。

西出さん:私は、好きなアーティストが出ているラジオ番組を週に1回聞いているので、ラジオになじみがある方だと思います。公共の電波に自分の声がのるということを考えると、緊張や不安もあります。自分が伝える言葉の責任を感じています。

大山さん:普段は「ハッピーぼうさい」で自分が出た回ぐらいしか聞いていません。ラジオは音声だけの出演ですので、緊張することなく楽しく収録させてもらっています。

橋倉さん:私もラジオを全く聞かないので、どうすれば皆さんに伝えたい防災の話をお届けできるのか、いつも悩みながら台本をつくったり、収録したりしています。

近藤さん:学生は、年間24本の番組を作ってくれています。2024年は、9月1日に「防災の日スペシャル」を組みました。また、1月には、阪神・淡路大震災の話をしたり、能登半島地震の被災地にボランティアに行った学生に現地で感じたことを話してもらったりしました。南海トラフ地震の臨時情報が8月に出ましたので、それを踏まえたトークも10月にしました。学生のみなさんは、どんな点で苦労し、どんな点を工夫しましたか。



西出さん:季節に合った、時期にあったテーマを選ぶことが重要だと思います。また、このプロジェクト以外にも私たちのゼミは他のいろいろな活動をしているので、参考になる話題を盛り込むようにしています。リアルさとわかりやすさからテーマを見つけることが多いです。みんなの意見を踏まえて、何が良いかを相談して台本を作るので、いろいろな角度でアイデアが生まれていると思います。能登半島地震をテーマに取り上げたのは、現場での感情、思ったことを伝えることによって、自分が同じように被災するかも知れないということを伝えたいと思ったからです。

大山さん:A4用紙にすると6〜7枚分の手稿を書くのですが、収録日と放送日に少し「ずれ」（タイムラグ）があるので、その「ずれ」を考えて制作するということも意識しています。

橋倉さん:長く続いているプロジェクトなので、これまでの放送と同じような情報ではなく、いかに新しい視点、新しい情報をお届けできるかということを考えています。音声だけなので、どうすれば情報をよりわかりやすく届けることができるかということも考えています。

近藤さん: SNSを使うことが得意な若い世代が音声だけで伝えようとする、かえって考え抜いて頑張ってくれるという面白さもあります。防災や災害の話題は、同じような語り口になってしまいうすいので、なかなかフレッシュな話をするのは難しいのですが、大事なことは大事なので、繰り返し伝えるスタイルにしています。自分の思いを伝える、自分の言葉で伝えると、同じ話であっても違って聞こえるはず。草津市危機管理課の職員さんも一緒に出演して、解説をしていただいています。学生と同じ世代の若い職員さんが、トークに入っていただく形でやっています。

小川さん: ラジオの収録と聞き、最初は驚きましたが、市の職員として疑問に答えることになるので、間違ったことを発信してはいけないと思い、自分の業務以外の担当の方にも話をお聞きしたり、自分で調べたりしています。そのため、大変勉強になっています。能登半島に行った経験談などをつかぐ機会があり、これもとても勉強になっています。消防団員さんから「あなたの声がラジオから聞こえてきたよ」とか、工事関係で関わった方から「この間、放送、聞きましたよ」とか言っていただくこともあります。

近藤さん: 防災はどうしてもご年配の方のプレゼンスが大きいという傾向がありますので、若者の声でお伝えすることが刺激になったり、若者の発想から新しいアイデアが生まれたりする、そんな可能性を秘めているのではないのでしょうか。若者は「学びの途中」ですから、リスナーの皆さんやご年配の方の経験や知恵を教えてもらうことによって、もっと学び合えると思います。中嶋さんは、番組がスタートした時点から出演しておられますが、どのように感じていますか。

中嶋さん: 多くの学生さんと出会いました。梅雨の時期ならば豪雨の注意を促す、どこかの地域で大きな災害があったならば、それを参考にして警戒を呼び掛けています。滋賀県ではこういうときどうしたら良いのか、草津市であればどういう対応をすれば良いのか。そうしたきめ細かい点を、危機管理の担当の方に解説していただいて、自分たちも学んでいくようにしています。ですので、マンネリ化することがありません。

近藤さん: 今年は阪神・淡路大震災 30 年でした。世間では「経験が風化しないように、語り継がないといけない」などと言われていますが、そこで大事なことは「語り直す」ことだと思います。いろいろな立場で「語り直す」、新たな思いで語り合ってみるのです。そんな取り組みを、放送を通して実現できてきたのではないかと思います。学生の皆さんと阪神・淡路大震災の話をする、全く古びていません。30 年も前の出来事であっても、息を吹き込むことができる。そして、記憶が息を吹き返す（リバイバルする）ようになるのです。

ゲストが来られることも、「学び合い」の輪を広げていると思います。2 年間ほど、草津市のご当地アイドルグループのフルーレットさんともコラボしましたよね。

中嶋さん: 学生と同世代、もしくはもっと下の子たちでした。防災の「ぼ」の字もあまり知らない、もともと興味がないという人たちとの出会いでしたが、楽しく防災についてトークすることができました。また、草津東高等学校の放送部の皆さんとのコラボも始まりました。放送部員ですから、

わかりやすく、アドリブも結構入れて、上手にやり取りしてくれます。すでに2度目の出演も叶いましたがこれから準レギュラーとして頑張ってくれるものと期待しています。高校生のみなさんは能登半島地震の被災地にボランティアに行かれるようです。これからも放送部の皆さんと関わって、若々しい番組づくりを目指していきたいと思います。

近藤さん:草津市が全国初になる「外国人の機能別消防団員」の方も番組に来られましたね。

中嶋さん:中国やフィリピン、その他いろいろな国の方が加入して、草津市で活動してくださっています。そして、そのなかにはすでに帰国された方もいらっしゃるのですが、現地のネット放送で「ハッピーぼうさい」を聞いてくださっています。だから母国でも、日本の防災の知識が伝わっていると思います。今は日本語だけで発信していますけれども、いろいろな言語で発信できるようにハードルを上げていきたいです。草津市は多くの外国人の方がいらっしゃるので、言葉が堪能な方に参加していただけたら嬉しいです。

近藤さん:その点、同感です！ さて、メンバーの中には、卒業論文でラジオを研究・調査した学生もいます。昨年は草津市内の山田小学校区の防災訓練の現場に出かけてアンケートをとりました。「どんなメディアの災害情報が信頼できるか」と尋ねたところ、テレビが1位で、次が行政の情報、ラジオは4位でした。「ハッピーぼうさい」を知っているという方は、回答者の4割ぐらい、実際に聞いている方は1割ぐらいでした。

えふえむ草津の取り組みでどこが評価できるかについて投票してもらった結果では、「草津市の情報にこだわった工夫」が上位にあります。やはり、地元こだわること重要ですね。身近なメディアを通して親しみやすい言葉で、若者と一緒に伝えるということを「ハッピーぼうさい」では大事にしています。今後どんなことを頑張っていきたいかをお聞きます。

大山さん:ラジオは聞いていないと言いましたが、好きなアーティストやお笑い芸人が出ている番組をポッドキャストで聴いています。音声だけのメディアですが、うまくやれば可能性も広がっていくのではないかと思います。

近藤さん:音声コンテンツとしては、まだまだポテンシャルがありそうだと感じてくれているようですね。ぜひ工夫していきましょう。西出さんはまもなく卒業ですね。プロジェクトに対する願いや期待をお願いします。

西出さん:台本作りから出演まで関わらせていただき、滋賀や草津に落とし込めました。もっと寄り添える、もっと草津の情報を入れ込めると思います。新しく2回生の滋賀出身の後輩が参加してくれますので、盛り上げていってほしいとです。

大山さん:1ヶ月に1回、2回と通っているうちに草津市に親近感が湧いてきました。草津市に寄り添った防災情報をもっと取り入れて、原稿に落とし込んで、草津市だけではなく大津市や滋賀県の防災放送と言えば「ハッピーぼうさい！」と言ってもらえるように、番組を作り続けていきたいと思っています。

橋倉さん:私は大津市に住んでいますが、他のゼミ生は大阪や兵庫の出身だったりしますので、草津市のいろいろなところにみんなで足を運ぶようにして、草津市の空気感を知ってもらい、それに合った防災情報をローカルメディアの強みを生かしながら発信していければと思っています。

中嶋さん:神戸、大阪、京都などから、毎月収録に来てくれています。緊張せずに楽しく収録に臨んでほしいと思います。楽しく、みんなが幸せな気持ちになるようにと「パッピーぼうさい」というタイトルが付きました。ハッピーな防災の発信を、これからも続けていきたいと思っています。

近藤さん:ハッピーにいろいろな人と繋がれるというのが、防災の魅力ではないかと思っています。そのような喜びを一つでも増やしていきたいと思っています。

参加者からいくつか質問がありました。その一部を紹介します。

問:大学ではどんなことを学んでいるのですか。

答:関西大学社会安全学部では「自然災害」（防災・減災）だけでなく、「社会災害」、たとえば、事故や犯罪の防止、企業のリスクマネジメントなども学んでいます。

近藤さん:自然災害については、文系の知識も理系の知識も大事です。理系では、なぜ災害が起きるのかというハザードのメカニズムなどを基礎から学ぶカリキュラムがあります。さらに工学的にどうやって被害を軽減化するのかなどを学ぶカリキュラムもあります。一方文系では、社会学や心理学、法学、行政学などを学んでいます。そして私のゼミでは、情報学、メディア論を学びます。

草津市の「えふえむ草津」プロジェクト以外にも全国各地で活動しています。神戸の小学校では、放送委員会の児童と大学生が一緒になって、給食の時間に流す防災放送の原稿作りもしています。放送をとおして全校児童の皆さんが通年で防災を学ぶことができる取り組みで、すでに 11 年間も続いています。入学したときから卒業するまで、しっかりと学べるプロジェクトです。

問:近藤ゼミと「えふえむ草津」の出会いのきっかけは何だったのでしょうか。

答:2015 年に草津市の「地区防災計画モデル策定事業」のアドバイザーの依頼を受けたことです。これは、小学校区ごとに防災計画のマニュアルをつくる取り組みです。最初に取り組んだ山田小学校区の皆さんから、計画づくりだけで終わるのではなく、自分たちの経験を市民の皆さんにも共有してほしいとのアイデアが提起され、「えふえむ草津」さんで特番を放送することになりました。これを契機に、防災の番組を定期的に流してはという声があがり、2017 年の 6 月からシリーズがスタートすることになりました。草津市役所からも全面的にご協力いただき、市の職員の方も、最初から一緒に携わってくださって、このように息長く続いてきたわけです。

問:思い出に残る回をそれぞれ教えてください。

答: (西出さん)「ペット避難」の回です。私が書いた原稿ではなく、一つ上の先輩が書いた原稿です。わたしは犬を 2 匹飼っていて、自分に関係のある話題でした。リスナーの方にも自分ごとに感じてもらえるような原稿を作ることが大切だと思うきっかけになった回でした。

(大山さん) 自分で原稿を書いた「南海トラフ地震臨時情報」の回です。南海トラフ地震臨時情報が発表されるまで、この情報のことをよく知らなかったので、ゼロからその情報を調べ始めました。台本作成には3日から4ほど時間を費やしましたが、皆さんも初めて知る情報なので、間違いがないように、照らし合わせながらつくりました。

(橋倉さん) 「阪神・淡路大震災 30 年」の回です。阪神・淡路大震災から 30 年という節目の年に、震災を経験しない私たち、若い世代と、震災を経験された方々と、その間を繋げるような原稿がくれたのではないかと自負しています。

(小川さん) 避難所に実際に泊まった体験を聞いた回が印象的でした。草津市でも備蓄用の段ボールベッドなどを買っていますが、実際に使うことはありません。放送の中で、「段ボールベッドの寝心地が意外と良かった」というポジティブな意見があったことが、わたしには新鮮に響きました。また、緩衝材のプチプチを使えば体温を逃さずに済むという話を聞いて、何気なく捨ててしまうものが、災害時にはかなり有効に使えるということを知り、これも良い意味で驚きました。

近藤さん: 福井の山奥の小学校の教室に段ボールベッドを置いて、学生が 1 泊の宿泊体験をし、感想を述べ合うという回でした。段ボールベッドは温かみもありますが、1 回寝るとやはり腰に負担がかかりますので、段ボールベッドの上に敷布団のようなものがあると良いことを、自らが体験して伝えてくれました。また、緩衝材のプチプチを使うと保温効果があるようです。暑すぎるぐらいで、汗だくになりましたということも学生が伝えてくれました。体験をもとに話すと情報がリアルになります。そして、「使える情報」、「生きた情報」になると思います。

(中嶋さん) 近藤ゼミには以前、重度の食物アレルギーの学生さんがおられて、いつもアレルギーを引き起こす食材（アレルゲン）が使われていないか確認してから食べていたそうなのですが、たまたま入ったラーメン屋さんのスープの中にピーナッツが入って行って、それを食べてしまって大変だったという体験を話してくれました。ご本人の実体験ですから、とても印象に残っています。最近は備蓄品の中にもアレルギーフリーの食材を準備するように各市町村でも考えておられるそうで、私たちも学ぶことができましたし、皆さんにも気をつけていただきたいと思います。

近藤さん: 身近な話題、課題などを取り上げて、自分の言葉で、自分なりの思いを込めて伝えると、心に響くと思います。コロナ禍でラジオのリスナーの数は増えました。あれだけ不安な 3 年近い日々を過ごしたわけですが、ラジオは好きなタイミングで好きなように聞けます。車を運転しながら、床屋さんで髪切りながら、夜中自分の部屋などで、付き合い方がいろいろあるということは、ラジオの可能性のひとつだと思います。挑戦のしがい、まだまだあると思います。



ファシリテーター：近藤 誠司 さん

西出さん、大山さん、橋倉さん、小川さん、中嶋さん、近藤さん、参加者のみなさん ありがとうございます。